

長谷川滋成著

『東晉詩詠注』

本書は、著者が前任の兵庫教育大学に在任中に準備され、本学に着任された後に上梓されたものである。浅学にして、著者のご業績を正當に享ける力のない身であれば、本書から字び得たいくつかの感想を記すことによつて紹介にかえたい。

本書の主な構成は以下のようなものである。

東晉の詩風／東晉詩詠注／東晉中期の風潮

本書の表題を冠する「東晉詩詠注」が、本書の中核をなすことは言うまでもないが、それに前後する「東晉の詩風」「東晉中期の風潮」は、單に詠注の理解の便に供する東晉詩概説に終わらない。ここでは著者の問題意識を出発点とした東晉文學論史の整理・把握・再構築がはかられている。つまり従來文學的に評價の低かつた東晉詩を、六朝文學の出発点として、西晉と劉宋をつなぐものとして再評價することが目指されている。

それ自体織りもの（テクスチャー）を表わしているテクストは、個々の作品のばらばらの理解ではなく、總体としての文學空間、つまり「文學史」としてもう一段大きな織りものに編み直されたとき、その本質的な姿を表す。その意味で、本書はそのような適確な文學史論考を備えており、東晉詩の理解と研究に資するものである。

東晉という社会的・政治的大混亂の時代。支配的な価値観（儒教）が動揺し、老莊が復活し、仏教が伝布し、そのクロスオーバーの中で道経が隆盛していく。著者がこの時代の文學空間に研究テーマを求めるとに充分な理由がある。

(A5判 五八七ページ 一九九四年五月 汲古書院)

一六〇〇〇円

(住田 勝)